

# SEMINAR HOUSE NEWS

## セミナー・ハウス'88春

- 宿泊利用者100万人達成を祝う
- ファカルティ・ディベロップメント —— 大学教員評価の視点 ——  
= 第141回大学共同セミナー =
- 言語・民族・国家 —— 多言語・多民族国家の諸問題を考える ——  
= 第142回大学共同セミナー =
- 神秘主義 —— 西洋思想のもうひとつの正統 ——



# ファカルティ・ディベロップメント

——大学教員評価の視点——

国際基督教大学教養学部長 絹川 正吉

②

最近読みました『学生消費者の時代』（喜多村和之著、リクルート刊）によりますと、アメリカの大学は「管理者支配の時代」から「教授団支配の時代」を経て、現在では「学生消費者の時代」であるといわれています。大学というのは、これまでのように教授のものでなく、今や学生のものであるというわけですが。しかし日本では、依然として、教授団支配の時代が続いているように見えます。

いろいろな学会に参加して諸先生のご意見を伺っていても、とにかく、形だけは教授団支配であり、そしてそれが確固たるものであるかのように思込まれています。大学はあくまでも研究中心であって「研究をしない大学は大学ではない」と。しかし、現実の大学では「研究というのは、先生方がご自分の職業として勝手にやっていることであって、私たちには関係ない」という学生を多数抱えています。東京大学でもいわゆる研究志望の学生がどの位いるでしょうか。おそらく日本では一番比率が高いと思いますが、それでも大多数は研究志望ではないとはっきり言えるわけです。そういう状況の中で、果たして教授団支配のいわば研究中心型の大学のあり方に安住していいのでしょうか。

## Scholar Teacher として脱皮を

一方、アメリカではボイヤー (E. L. Boyer) の『College: The Undergraduate Experience in America』 (Harper & Row) という本が最近出版されて話題となっています。その中で、彼は「大学の本質的機能は教育である」と相

当に思い切った提言をしています。消費者集団の支配の手の中にあるアメリカの多くの大学では、大学の魅力開発とは学生の要求にこたえることだと考えています。ですから、学生の好みによって、コースを開講したりしていますので、必ずしも出てくるコースがアカデミックなものとは限りません。さらに、学習の仕方や単位の取り方などもなるべく学生が取り易いようにする傾向が見られます。

しかしながら、学生消費者の時代であっても、やはり大学は、大学として本来のあるべき姿というものを求めなければならぬでしょう。大学では研究機能と教育機能が、相互に深い関係にあるべきでありますから、大学教員は単に研究者であればよいのではなく、また単に教育者であればよいのでもありません。

アメリカの大学でも、大学というのは学生の要求のみに適応してはいけぬのだという声が起こっています。そういう考え方は、社会にはなかなか理解されないような事柄だと思えますけれども、学問に携わっているものにとつては直観的によくわかります。やはり私たち大学教員は、研究がなくなってしまうたら空っぽになってしまいますから、にもかかわらず、大学の本質的な機能は教育であるということをも、まともに自分自身の身に引き受けなければならないところまで押し詰められています。これは非常に深刻な問題です。とにかく、大学というものは、「時代の変化の圧力に抵抗すれば生命力を失い、安易に変化に従属すれば本質を失って」しまいます。

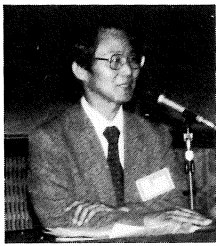
こうした非常にきわどい状況の中で、大学教員は、十分な行政的配慮のもとで（後述参照）、従来の単に研究だけを至上とするようなあり方から、ボイヤーのいう Scholar Teacher として脱皮する必要があるのではないのでしょうか。

## 知的領域への導入に失敗

今日、日本の大学では大半の学生が大学の講義についてこれない、といわれています。これまでは、わからない学生がいても、それは学生の責任であって、教員の責任ではない、という対応をしてきましたが、もはやそういうことでは済まなくなっているのではないのでしょうか。研究するのは先生方の勝手でしょう。勉強しないのは私たちの勝手でしょう」という大学の存立そのものを脅かしている状況自体を、私は一番懸念しています。

一般的に言いますと、大学教員は学問を至上の宝と考える一つの共通した価値観を持っています。それは学問というものに対する sensitivity あるはもう少し広くとつて、知的領域への sensitivity についての共通感覚だろうと思います。今の大学は、そういう共通感覚に学生を導入することに完全に失敗しているのではないかと。これが私の懸念であります。

『世界』九月号で、東京大学の竹内啓教授は、大学教育とは「学部文化を身につけさせることである」と述べています。竹内教授の「学部文化」という言葉に大変啓発されましたが、その発想は、依然として専門学部教育を前提



としているように思われます。学部文化への導入ということだけでは、今の事態は掴みきれないと私は考えるのです。

思想的には、もっと根源的な、人間の知的な営みの本質に関わる事態に、亀裂といたしましょうか、修復できないような何かが起こっていると考えなければなりません。つまり、人間にとって知的営為がいかに大切なものであるかということ、次の世代に継承させることに失敗すれば、現に失敗しつつあるのですが、それは人類にとって、取り返すことのできない大きな過ちを犯すことになるのではないのでしょうか。

### 教授団としての取り組み

こうした切迫した事態が進行しているにもかかわらず、日本では個々の教員の努力の問題あるいは個人倫理の問題に還元されて、大学としてあるいは教授団として、この問題を真正面から受け止めて、立ち向かっていこうという努力が不足しています。

アメリカの大学では、社会の要求や動向によって教員の身分も左右されます。アメリカのある州立大学の数学の先生が言っておられましたけれども、現在アメリカでは、数学を専攻する学生が急激に減少しているそうです。数学を勉強しPh.Dを取ったとしても職がない。コンピュータ・サイエンスを出た者は売れるけれども、純粹数学を専攻した者は売れないので、学生がどんどん減ってしまうというわけです。その結果、大学にどういった影響が出てくるかといいますと、州が予算を

握っていますから、学生に人気のない学科はどんどん切り捨てられていきます。自分もいつまで身分がもつかわからない、とその先生は言っていました。そういう例が示しているように、アメリカでは社会の動向が直接に大学に影響を与えますので、どうしても教授団として対抗せざるを得ません。

それに対して日本の大学は、特に国立大学は親方日の丸で、あいだに文部省を介して対応しますので、直接、社会の変化と向き合うことはありません。私立大学の場合にも、学長が文部省に対応していればそれで済んでしまします。教育学の専門家の人達は、もっと端的にこうした現状を分析し、私たちに問題の所在を明らかにする責任があるかと思えます。

### 教員評価の変革

こういう状況の中で、大学教員評価の問題が起こっているわけです。アメリカでの教員評価は非常に多様で、一口では言えませんし、実際に多くの研究があります。日本でも玉川大学の出版局で、大学の教育問題についての一連の研究書をお出しになっています。けれども、そういう本を読んでも、直接にどうしたら良いかというヒントがなかなか出てきません。そこで、まずは身近なところから大学の教員評価のあり方を、変革していく運動を起すべきではないでしょうか。現在の教員評価というのは、一言で言って研究業績中心主義ですが、大学の本質的機能が教育であるとするならば、やはり大学の教員評価のあ

り方も変えていくべきでありましょう。

ところで、これまでの研究業績中心の評価も、実際にどのように行なわれているのかといえよくわからないところがあります。特に、ICUのように4年制の教養学部でありますと、学問の王といわれる数学から、いわゆる現代的な新しい学問の先生方までが一堂に会して教員評価をしますので、単一の尺度では決め難くなります。例えば、ある領域では、最左翼になりますと、これが本当に学問的業績であるのか、思想の表現なのかどうか、よくわからないようなものも出てきています。established discipline からみると、単に感想を書いているに過ぎないように見えます。しかしそれはundevloped countryではありませんけれども、developしつつあるdiscipline にとっては、非常に大切な画期的な業績であるかも知れません。

このような教員評価の実態の中で、私たちは研究業績中心の評価システムから解放され、教員評価の多様化を模索しなければなりません。もちろん、研究能力を無視してよいということではありません。教育能力を無視して大学教員を評価することができないようなシステムを創出することが、必要であると主張しているのです。これまでのように大学教員の教育努力を、教員個人の問題に閉じ込めてしまうのではなく、それを公的なこととして認知する方策を立てることが課題であります。この課題を担うことを通して、大学教員の意識改革を導き、大学のアイデンティティの確立を、新たに希求したいと思うのです。

# 第141回 大学共同 セミナー

## 言語・民族・国家 ——多言語・多民族国家の 諸問題を考える——

|| 主題 ||

### ▼ゲスト講演

Language, Nation and State  
豪モナッシュ大学教授  
John D. BEGGE 氏

### ▼全体講義

「草の根」にみる国民形成  
東京外国語大学アジア・アフリカ言語  
文化研究所教授 飯島 茂氏  
▼セクション演習  
A アメリカ社会における政治的統合  
放送大学教養学部教授 阿部 斉氏

### ▼参加者58名27校

東京外国語(9)、筑波(8)、津田塾・早稲田(各5)、日本女子(3)、東北・青山学院・慶応義塾・中央・中部(各2)、千葉・東京・お茶の水女子・一橋・横浜国立・東京都立・都留文科・東京国際・上智・創価・東京女子・東京理科・法政・明治学院・立教・神奈川・放送(各1)、その他(1)

現在、世界にはおよそ五〇億の人々が

期 日  
'87. 11. 13~15

### B 対米比較の視点からみたカナダ研究

東京外国語大学外国語学部教授  
小浪 充氏

### C 東南アジアの言語・民族・国家

中部大学国際関係学部教授  
田中恭子氏

### D アフリカの多様性とその現状

日本大学国際関係学部助教授  
青木一能氏

### ▼運営委員

東京外国語大学外国語学部教授  
小浪 充氏

五〇〇以上の違う言語をもつて一六〇から一七〇位の国家に分かれて生活している。アメリカ、カナダ、中国、ソ連など世界の主要国はほとんどが多言語・多民族国家であるといわれているが、これらの多民族国家が国内政治、社会面でのどのような困難な問題に直面しているのかということ、北米、アジア、アフリカの事例を通して学びながら、現代国家・社会は今後どうあるべきかを考えようとするのが、今回のセミナーの目的である。東南アジア諸国が持っている「多様性」

への興味関心の高まりを反映してか、Cセクションの定員がオーバーするという状況の中で、歴史、政治、言語、国際関係などさまざまな専門を異にする27大学から58名の参加者を得てセミナーは開催された。なお、運営委員の小浪氏はじめ、講演、演習指導を引き受けて下さったレック、飯島、阿部、田中、青木の五氏に対して、紙面を通してここに改めて感謝の意を表したい。

開講に先立ち運営委員の小浪氏は、「言語・民族・国家」というテーマは、言語学、文化人類学、政治学、社会学等さまざまな分野からの多様なアプローチが可能であり、どこから手を付けてよいか分からないほどであるが、こうして、多様な分野の講師、参加者が一堂に会してセミナーを開催できることは大変に意義がある、と挨拶された。

まず共通セクションでは、セクション指導の各講師から次の通り問題提起があった。「アメリカはよく多民族国家だといわれるが、「民族」とは、政治的に考えれば多くの場合、独立を目指して nation state になろうとして運動している集団のことであるから、むしろ multiethnic state であると呼ぶべきだろう。ただ、アメリカの場合、エスニック・グループの中に黒人やインディアンなど人種の違う人々を含めるかどうかという大きな問題があるが、現在ではかれらのような人

種の違う集団も含めてエスニック・グループを考えるようになっていて」と阿部氏は「民族」と「エスニック」の違いを強調された。

また、このように多様なエスニック・グループを抱えたアメリカは、国家統合が困難で分裂してしまう可能性が高いにもかかわらず、「イギリスから渡った人々が持っていた啓蒙的自由主義が政治を動かす普遍的な原理となっているために、政治的には極めて一元的な価値体系のもとに同質的な社会を形成している」と阿部氏は、アメリカにおける政治的な統合の問題について解題された。

「アメリカ、中国、日本、オーストラリアにもないような問題が東南アジアにはあるということが、緊張感をもってひしひしと感じられる。さまざまなエスニック・グループを含みながら、いかに nation building をしていくかということが、東南アジア諸国の共通の課題になっている。言語、文化、宗教、エスニック・グループの分裂は国家の解体、社会の不安定要因となるので、これを何とか克服して統合に向かっていかなければならぬ」この地域は、無数の島からできていようように、そもそもから多様性に富んでいる。その上に大陸部では中国からの大規模の民族移動があって、多くの中国系民族がインドシナ半島に住みつき、各国の多数派を形成したために、元来、その地にいた人々が少数派になってしまっ



各セクションの問題提起  
——青木、阿部、小浪、田中諸氏（左から）

た。また特に、この地域の海洋部は、中国とインドという大文明の中間に位置しているために、東西からさまざまな言語、文化、宗教が行き来していた。さらに、タイを除いてすべての地域が植民地化されると今度は、近代部門の担い手としてインドや中国から大量の移民が渡来した」と田中氏は、東南アジアでは二重三重の多様性を抱えつつ経済発展を最大の目標にかかげながら国民統合を模索している段階であることを指摘された。

「アフリカは多言語、多民族そのものである。アフリカでは国家としてまとまっていく必然性が全くないような国が沢山ある。その原因を探ってみると、アフリカの歴史が「受身の歴史」であった

というところに行き着く。一五世紀から一九世紀にかけての奴隷貿易の時代にそれまでの平和な首長制社会が崩れ、さらに、一九世紀後半には植民地主義によるアフリカ分割によって人工的な国境線が引かれて、さまざまな社会集団がその中に組み込まれた。二〇世紀中頃になると、この植民地時代の枠を前提に独立がなされた。つまり、国家という枠組は何とかなってきたものの国内の統一がなされないままになっているのである。つまり、アフリカにおける多民族国家の持つ特徴は、他の地域に見られるような多数派が少数派を抑圧するという図式ではなく、多数派のエスニック・グループ同士の対立抗争になっているところだ」と青木氏は、ナショナリズムが全く育っていない状態で国家という枠組だけが与えられたアフリカ諸国の持つ深刻な実情を報告しながら、近代国家そのものの妥当性に対する疑問を述べた。

第二日午前中は、東京外国語大学で開かれていた国際シンポジウム「地域研究と社会科学」に出席のために来日中のレック氏のゲスト講演があった。

氏は、無数の島々からなり、二〇〇とも三〇〇ともいわれるエスニック・グループに分かれ、互いに身体的特徴、言語、生活様式を異にしている高度な複合社会であるインドネシアを事例に近代国家の成立条件を持たない社会における国家統合の難しさについて語られた。「国

家に分裂をもたらす要因は何か。言語、宗教などの文化的な対立と階層的対立が一致すると国家の安定性が崩れやすく分裂の原因になるが、この違いがバラバラであれば、大きな分裂には至らない。つまり、文化的対立が経済生活の格差として現われるようになると国家の統合は非常に困難になってくる」と指摘された。さらに午後には前半部分で、飯島氏の全体講義「草の根」にみる国民形成」があった。

「形質人類学者によれば、日本ほど多様な人種構成になっている国は珍しいという。これほど多様な人種がいた日本が、なぜこのような国民形成を成し遂げることができたのか。「海の中の山国」として防衛問題のない平和な環境であったこと、温暖な気候の中で豊富な食物に恵まれていたなどの理由に加えて、プリミティブな段階からゆるゆると時間を十分にかけながら技術水準を高めることができたからではないだろうか」

「タイのカレン族は、焼畑をしながら移動生活をしている間は、他のエスニック・グループと混じり合う必要がなく排他的であったが、水田稲作をはじめ、定住生活をするようになると、価値観の異なる人々と一緒に灌漑組織などを作らなければならなくなり、そうした過程で、次第に国民文化を受け入れ、タイ人化していった。血の原理で生きていた人間が、このように次第に地縁原理に支えられられるような社会に入っていくかざるをえなく

なって、他のエスニック・グループと妥協をはかるところに「草の根」の国民形成があるのではないか。つまり国家政府の指導による上からの急激な力を加えるのではなく、なるべく民衆を信頼して民衆のイニシアティブに任せるほうがうまくいくのではないか」と飯島氏は、多民族国家の国民形成はこれまでのような国家的視点ではない「草の根」の視点が重要であることを主張された。

続くシンポジウムでは、先進国が抱える問題と後進国が抱える問題の違いが浮彫りになった。

先進国では「ナショナリズムによって補強される必要がないほど、国家という枠組は完全に確立され、基本的な前提になっている。日本にとっても国家それ自体を安定させるという意味でのナショナリズムというのは存在理由を持たないのではないか（阿部氏）との発言に対して、田中氏は東南アジアの場合には、全くその逆であることを指摘する。「国家の枠内の多様性をいかに克服して統合をもたらすのか、ということに苦闘してきた。主権国家を建設することに一生懸命になっているのが実状だ。現実の国際関係においては、主権国家が基本単位である以上、他の主権国家に引き離されるのは困る。先進国との生活水準のギャップを縮めるためには、好むと好まざるとに拘らず、植民地支配者たちが残した近代国家としての枠組を国民全体の利益のために膨らましていくこうとするのが、東南へ

# 第142回 大学共同 セミナー

## 神秘主義

＝主題＝

### 西洋思想のもうひとつの正統

期	日
'87. 12. 4	～ 6

#### ▼ゲスト講演

ルネサンス美術にみる神秘主義  
— デューラーとミケランジェロに關する試論 —  
東京芸術大学音楽学部教授  
若桑みどり氏

#### ▼セクション演習

A 「ヨーロッパ神秘思想」理解のおもしろさとむずかしさ  
信州大学人文学部教授 南原 実氏  
B アメリカ文学と神秘主義  
東京外国語大学外国語学部教授

#### ▼参加者40名(内女子19名)

東京(7)、東京外国語(4)、青山学院・早稲田(各3)、東京都立・学習院・慶応義塾・東京女子(各2)、筑波・千葉・信州・放送・成城・大正・中央・明治学院・共立女子短期(各1)、その他(6)、以上17校。

◇  
どの文化でも「確実に存在してはいるが、本来ことばで言い表わすことのできない」ものを必ず持っている。それは時には、ことばよりも「より根元的な真実」

C イタリア・ルネサンスにおける神秘主義  
— フィレンツェ・プラトン主義者の「愛の理論」を手がかりに —  
北海道大学文学部助手 伊藤博明氏

D 神殿の建設  
— ある神秘主義的イメージとその変遷 —  
神秘主義研究者 松本夏樹氏

▼運営委員  
東京大学文学部教授 川端香男里氏

志村正雄氏  
を表現し、それぞれの文化の中核に潜みつつ、日常的な現実の世界を超えて、絶えず新たな「息吹き」を送り込んでくる。別掲の参加者からの感想文が伝えている通り、人はこの「息吹き」に触れた時、自らの「内に秘められた広大な世界」を覚醒し、生命の充溢を覚えつつ、住み慣れた世界の風景が一変するのを発見する。古今東西を問わず、「神秘的なるもの」が多くの人々の心をとらえてやまなかつた理由も、おそらくここににあるのだろう。

われわれの時代は、今(世紀末)へと向って一歩一歩その歩を進めている。時代の終焉を迎える中で、合理的認識では割り切れない領域への人々の関心が高まり、現代の神秘主義は様々な思想的潮流を取り込みながらも、一種の風俗現象のような観さえ呈している。もとより、神秘主義は、時代、社会、文化の違いによって多様な表現形態をとって出現してきた。今回のセミナーでは、運営委員・川端香男里氏の構想に基づき、特に「西洋思想が営々として築き上げてきた強固な精神的伝統としての神秘主義」を取り上げた。講師には、氏のご尽力により、西洋において西洋人と伍して研鑽を積んでこられた方々をお招きし、参加者はヨーロッパの神秘主義的潮流の源泉を探る二泊三日の「魂の旅」へと出立した。

◇

「西洋思想のもうひとつの正統」という副題に指し示されるように、今回の課題は神秘主義という、いわば「逆遠近法」を用いて、西洋思想の本質に迫ることである。英語の *mysticism* が、「目または口を閉じる」というギリシャ語「ミューオー」に由来するように、神秘主義は常に「日常的・合理的認識の枠を超えた体験」に根差している。そのため、通常のセミナーとは違い、ことばだけでは「語り尽くせない」要素が多々あるため、今回はスライドやVTRを駆使しながら、主としてイメージによって精神表現の解説を目指す「イコノロジー」Ⅱ「絵解き」

「西洋思想のもうひとつの正統」という副題に指し示されるように、今回の課題は神秘主義という、いわば「逆遠近法」を用いて、西洋思想の本質に迫ることである。英語の *mysticism* が、「目または口を閉じる」というギリシャ語「ミューオー」に由来するように、神秘主義は常に「日常的・合理的認識の枠を超えた体験」に根差している。そのため、通常のセミナーとは違い、ことばだけでは「語り尽くせない」要素が多々あるため、今回はスライドやVTRを駆使しながら、主としてイメージによって精神表現の解説を目指す「イコノロジー」Ⅱ「絵解き」

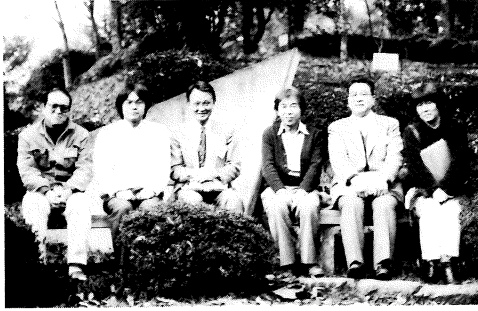
アフリカ諸国の政府の共通した願いであり、政策であり、いままで行なってきた行動の中心である」ことを指摘する。青木氏は、アフリカの事例にふれながら国家のあり方について発言する。「ケバックの分離独立運動とアフリカのそれは、現象的には同じ運動形態をなしているが、そこに至るまでのプロセス、つまりアフリカの場合には、近代化を推し進めるなかで国家の枠組を強化していくことが課題となつているという点で異なる」という。さらに「近代西洋で成立した nation state をそのままアフリカにあてはめることが良いのか悪いのかということではなく、むしろ各地域や国家の個性を生かすような形でのあり方を模索すべきではないか」と、国家の一般論ではなく、各地域の個性に根ざしたあり方を模索することの必要性を強調された。

多民族国家が抱える問題は、地域的にも、歴史的にもさまざまなスペクトラムを見せるために、共通の解決方法を見出すことは到底不可能であろう。多民族国家においては、分裂に至らない多様性」ということを考えていくことが大事だが、そのためには「遺伝的 *genetic*」なものと文化的なものが一致しないようにすることだ。ある血統に属する人が持つている特定の文化に、他の血統の人たちがもっと興味を示していくことが必要ではないか」と小浪氏は、エスニックな違いが大きな分裂を引き起こすことを避けるためのストラテジーを示唆された。

の手法が導入された。思想、絵画、建築、文学に即しながら、なるべく具体的かつ明確な形態表現を通じて、神秘主義という難解なテーマへの接近が試みられた。

◇

美術史家・若桑みどり氏によれば、現在、神秘主義研究家が美術史の領域に果敢に切り込みつつあり、「今後十数年の間にミケランジェロやレオナルド・ダ・ヴィンチなどルネサンスの傑作と言われる美術作品の多くが、今とは全く違った視点から読み換えされる可能性が出てきている」という。このような最新の美術史の流れに立って、ゲスト講演の中で、氏は、ミケランジェロの作品の中に見られる神秘主義的表現を読み取ろうとする「試論」を展開した。



左から松本、伊藤、志村、南原、川端、若桑の諸氏

16世紀初めのキリスト教の中には、カ

バラ主義やヘルメス思想などきわめて多様な思想が入り込んでいた。その最後の思想的な豊穡の時代に活躍したのが、ミケランジェロである。当時の「正統なカトリック神学がミケランジェロの作品の conceptual な基礎にある」とする多くの美術史家に対し、若桑氏は、彼が十代に作った一枚の浮き彫りが、ヘルメス主義の宇宙論を形象化したデューラーの「メレンコリアI」という版画にきわめて類似している点に着目。そこに、15世紀末に「新しい意味」を担って復活した「エソテリック（秘教的）な宇宙論」が読み取れるという。

氏は、新プラトン主義者の神秘の世界観こそが、ミケランジェロの作品を解く鍵ではないかと結論し、今後表層的な解釈を超えて、ルネサンス芸術を理解してゆくためにも、より実証的な「神秘主義的イコノロジー」の確立の必要性を訴えた。学会の最先端をゆくような氏は、参加者にとってはやや難解であったようだが、「何かある新しい考えが生れてくる現場に出会うような感じ」を与えることとなった。

◇

初日の夜、全体講義で松本夏樹氏は60枚にも及ぶ豊富なスライドを使いながら、ヨーロッパ人の精神の中にほとんど血肉化してしまっている「神殿の象徴的なイメージ」を視覚的に掘り起こした。ヨーロッパ精神史を貫通する神秘主義的世界像の一端を明らかにすべく、古代ユ

ダヤ教から出発し、キリスト教、ローマ帝国の密儀宗教、16、17世紀の薔薇十字会運動、フリーメイソンの思想、ヨーゼフ・ボイスの現代芸術までをカバーした氏の話に対し、「知っていると思い込んでいたが、西洋についてはあまりにも知らないことが多い」との感想が寄せられ、参加者は改めてヨーロッパ精神史の「奥深さ」を感じさせられた。

◇

二日目の午後は、「アメリカ文学と神秘主義の関連を歴史的に考察した」志村正雄氏の全体講義IIと講師の全員参加によるシンポジウムが催された。

志村氏は、個々の作家の具体的な文学作品を用いて、現代に至るまでアメリカ文学の中に脈々と流れている神秘主義的な伝統を歴史的に例証した。「地球と生物がいかにハーモニーを保って生きてゆかかという発想はヘルメス主義の根本にある」（川端氏）と言われるが、六十年代にいち早く環境破壊の問題を取り上げたレイチェル・カーソンの「沈黙の春」の中に、ソローやエマーソンの神秘主義的な感覚が息づいているとの氏の指摘は、「神秘主義とエコロジーの意外な関連性」を明らかにした点で、特に聴衆の興味を引いたようであった。

続いて行われたシンポジウムでは、「魂の運動の軌跡としてのヨーロッパ神秘思想の特質」（南原美氏）、「イタリヤ・ルネサンスにおけるプラトン主義者にみる神秘主義」（伊藤博明氏）についての報告

私たちは相対的に見て同質性が高い国に住んでいるために、ともすると実際には少数民族を抱えているにも拘らず、単一民族国家であるとの思い込みが強い。多言語、多民族の国家は、先進国においてもいろいろ障害を投げかけているのが実情であるが、だからといって、国家はもはや不必要であると言いつけることはできない。世界的に見ても、今でも「国家は事実として存在しているのであり、ここを出発点にしていかなければならない」（青木氏）だろう。また他方では、「国籍というのは人工的なものであって、自分の体には流れている血とは全く関係がない」との参加者の発言もあり、国家に対するアイデンティティを絶対視することなく、私たちが人間として生きていくうえで国家はいかなる意味をもちうるのか、という国家そのものを相対化する観点も併せて出された。

こうして私たちは、世界の国家が抱えている多言語、多民族の諸問題を冷静に観察、分析するなかで、現実的な対応策を考えつつ、同時に国家を超えた地球人としての連帯意識の形成の可能性をも模索することが緊急の課題となっているといえよう。

\* \* \*

を受け、前者の「内面的体験を重んじる」傾向と後者の「知の歴史を積み重ねてゆく」傾向の「神秘主義における二つの流れ」を軸としながら、討論が展開した。

後半のディスカッションでは、「エゴイズムを脱却し、魂の底で神が誕生する経験や魂が上昇して、『一者』に到達する経験を持つ人間は極くわずかだとすれば、そういう経験を持たない大多数の者は救いに預かれないのか」との質問に対して、「神が魂の底に生れる経験を持つのは、修練を積んだ一部の神秘思想家だけではない。神秘思想家がそういう体験

### 参加者の感想から

#### 風景との出会い、人との出会い

信州大学大学院人文科学研究科 M2

土谷 清

セミナー・ハウスで行われた共同セミナーに参加するため初めて多摩を訪れました。中央自動車道からセミナー・ハウスに向かう道に入ると、道路は車で埋め尽くされ、その両側には色とりどりの人工物が雑然と立ち並ぶというおなじみの風景にぶつかりました。それは風景とも呼べない何とも名付けられないもので、多摩に来てそれに会ったといっても私は特に驚きも失望もありませんでした。しかしセミナー・ハウスのある丘がまるで孤島のようにその周囲の喧噪とは全く切り離されたところにあるというところは驚きでした。よく手入れされた木立の中を歩くと、十二月になっていたというのに空気がやわらかなお晩秋の趣きでした。そこには空気の動きと光の加減が織り成す風景がありました。セミナーは同じように雑踏の海を越えて孤

をしたことによって、それは万人に可能性として与えられている。だからこそ、神秘主義はヨーロッパの大衆を巻き込む大きな運動となった」(南原氏)との応答があり、フロアーを交えての活発な質疑応答がなされた。また、ヨーロッパの神秘思想を理解する上では「神と合一して新しく生まれ変わった魂が再び現実の社会に戻ってくるのが大切」との南原氏のコメントは、印象に残った。



最終日は、通例に従い、学生が中心になって運営する総括討論の場に当てられ

島にやって来た人の集まりでした。第一印象を交換し、自己紹介をし合い、話を聞き、話をするうち、私は自分が美に生き生きと対話しているのを感じていました。感覚は鋭敏になり私の目は話し相手の表情をすばやく読み取り、耳は声はどこから発せられているのかをはっきりと聞き分けていました。初めて訪れた場所です。初対面の人達の中で私と私の世界が新たに生まれ出でてつあるのに私は立ち

合っていたのです。セミナーが進むうち何故かこのセミナーに参加しなければならなかったのが明らかになりました。多摩の風景に出会うため、新しい人々に出会うためです。私にはもうひとつ、日頃よくお会いする人が全く違って見え、聞き覚えのあるはずの音が初めて聞く声のように響くという体験がありました。始めは不思議でしたがやがて私は私の日々の怠惰に思い至りました。決して聞き逃すべきではない声に対してすらも鈍感になってしまったことを知るのにはつらいことでした。それは風景に無関心になるのと同じ「なれ」の仕業です。それは避け難く私に付き纏うもののようにです。怠惰に始まって人は風景を失い自らを失います。私は自分が日々そうなりつつあるということを知らずにいました。共同セミナーに参加し

た。前夜に降り積った雪が、「迷宮のような構造」(松本氏)を持ったハウスのキャンパスを「神秘的な空間」へと変貌させたかのような雰囲気の中、前半は各セッションの代表による演習報告、後半は現代ドイツの芸術家・ボイスのパフォーマンスを記録したVTRの上演と講師を交えた自由な討論が行われた。今回のセミナーの眼目は、「キリスト教の信仰を新プラトン主義やヘルメスのことばで語る」(南原氏) ことにあった。このような二重信仰に基づいた西洋人の「心の襞」に触れることは、われわれ日

#### 忘れ得ぬイニシエーション

—— 日常性を解体する「もう一つ」の現実 ——

早稲田大学法学部卒 田中 健夫

今我々は、西洋の近代的ロゴスによって確立された世界内に安住している。しかしA・アルトは「我々の言語は、かかさしてむき出しの観念を選んではしまった。そこからこの現実世界は「無力な状態」で我々に現前する」のだ。

今回は、そこから離れた「もう一つの現実」を探す試みであった。日常的に慣れ親しんだ現実から一旦離れて混沌の中に放り出されたとき、人は果たしてそこからどのような「世界」を新たに構築していったのか。松本先生は最終スライドを使い、「イニエーション」からそういって世界を「体験」させてくれた。古代から現代に渡って人々のそのような軌跡をたどるとき、人々の観念の蓄積は「神殿」

本人にとつてはきわめて困難な作業ではあるが、「それを掴まなければ、西洋は絶対にわからない」。「キリスト教が中心軸となつて、様々な思想を取り込みながら、作り上げてきた神秘主義という壮大な伝統」の一端を「いくらかでもなぞることができた」とすれば、一つの収穫であった(川端氏) と言えよう。

なお、今回のセミナーは、テーマと同日タイトルで近々「せりか書房」から刊行される予定である。

元来、このような分野の習得は講義や議論のみでは納得できないことが多い。言葉にして語りつくせぬものには沈黙あるのみ、沈黙して自分が求めたものの方でこちらにやってくるのを待つしかない。セミナー・ハウスはその点で充分な静寂を与えてくれる。都会から離れた自然の中で起居する。そしてコルビジェの薫陶を受けたという設計者によって造られた緑の迷宮のような敷地内。皆、日常性を解体するのに役立つ。イニシエーションのために御膳立てされたと思えないほどだ。

しかしそのような沈黙を守れない者は夜を徹して行われる「自主ゼミ」に参加すればよい。そこでは言葉による納得ゆく解答は期待できない。むしろ言葉で納得してしまつた場合、そのこと自体を警戒した方がよい。しかし「納得することのできる自分」を練り上げるには格好の場だ。私には忘れ得ぬ通過儀礼の夜となつた。セミナー・ハウスの皆さん、どうも有難う。そして明方までつきあって下さつた先生方、本当に有難うございました。



# ▼▼私の大学生活と セミナー・ハウス▲▲▲

## 新入生の軌跡

### 「学問の場」の発見

慶応義塾大学文学部1年 中島 隆博

私は昨年12月の第14回大学共同セミナーに参加しました。

セミナーの内容は高度で、私のような若輩には些か難解なところもあったのですが、学問の奥深さを体験したという意味において、それはそれとして意義のあることだったと思っています。ソクラテスの「無知の知」という言葉が身にしみたような気がします。

さて、共同セミナーでの最大の収穫は、学部や大学を超えた様々の人達との出会いがあったことです。それも皆が皆、主体的にこうした学問の場に参加しようとする気概を持った人達ばかりで、その並々ならぬ知的好奇心、そして知識の深さにはただ驚かされるばかりでした。

大学の一般教養の講義の中に「退屈」の二文字しか見い出せなかった私にとって、共同セミナーの体験は全く新しいものでした。そこには本来の大学の在り方が示されていたような気がしました。

大学のレジャーランド化といったことが、昨今良く言われるようになりましたが、そんな風潮の中で、大学共同セミナー

は、いつまでも私達に知的でエキサイティングな学問の場を提供し続ける存在であって欲しいと思います。

現在、政治も経済も文化も、そしてその根底にある価値観さえもが大きな激動の時代を迎え、その再編を余儀なくされています。従来のように分節化され、専門化された個々の学問の中に解答を見出すのはとても難しいことに違いありません。だからこそ、「学際性」という言葉がさかんに使われ、様々な分野の交流が行われてきていると思うのですが、この大学共同セミナーはその雛形として、未来への新しい視座を開く可能性を持ち続けて欲しいのです。私は一年生でありながら、このような良き場にめぐり会えたことをとても幸運に思っています。私の大学生活はまだまだ三年間も残っています。これからの新しい時代、21世紀を担ってゆく者の一人として、真理を極めてゆく者の一人として、この大学共同セミナーを良き伴侶としてゆきたいと思っています。

最後になりましたが、お世話になったセミナー・ハウス企画室の方々、指導教授の方々、そして色々と語り合った仲間達に心から感謝をしたいと思います。

## 卒業にあたって

### 冬合宿の思い出

早稲田大学商学部4年 永尾 光治

わが新澤ゼミでは、毎年2月に行われる冬合宿が、卒論の最終発表の場となる。そして、四年のゼミ生にとっては、これが最期の授業となる。いわば今までゼミでの研究の成果を発表するだけでなく、学生生活を締めくくる大きな区切にもなる。その場所が、ここ八王子なのである。

広い敷地は、自然に満ち、木が多く植えられ、斜面を利用した建物の配置が、絶妙に溶け合っており、ここを訪れる者皆が、等しく迎えてくれる、そんな力強さに似た温かさを感じずにはいられない。これこそが、まさに理想の環境であり、理想そのものである。

このすばらしい環境の中で、数々の思い出が残せたのは言うまでもない。しかし、その中でも、是非ともここに記しておきたい思い出は、長い間御指導して下さった先生や友との距離が、卒業を目の前にして、より近くなったかのように、このセミナー・ハウスの西の空にある富士山が、心なしか大きく見えたことである。

\* \* \*

### “学び”を醸成する場

法政大学法学部4年 野倉 恵

大学三年の夏、私は大学院共同セミナー「人間性と犯罪」に初めて参加しました。自由闊達な討論、テーマに向って各々の専門分野を超えた、若い知力が熟されていった過程が、今もありありと

目に浮びます。

私は、刑法ゼミでごく普通に活動している学部生にすぎませんでしたが、参加者は、法学部の大学院生や心理学を学ぶ教員職を志す人、すでに医師の肩書きを持つ人など、実に様々でした。「個人が社会への信頼感を持つ基礎となる共感性や情緒の芽が、その育成過程でうまく育たないことが問題の遠因だ」「心理学、法律学、精神医学を越えた総合人間学的な犯罪学の構築が必要だ」「いや、各領域ごとに異なる立場に立ったチェック機能こそ重要だ」等々の議論に、私のような「素人感覚」の学生も精一杯ついていきました。

私はこうして、在学中に合計四度もセミナーに参加しました。その都度、参加した仲間が学ぶというを通して確かな手応えを得ていくのを見ることができました。まさにそれは、本来、大学という空間の中で醸成されていくはずの“学び”の過程だったと思います。自らの位置が定まらず、「知」への膨大なエネルギーを秘めている多くの「新人類学生」にこういう場を知ってほしいと私は思います。

アットホームでこじんまりとしたセミナー・ハウス、そして職員の方々の暖かい心配りの数々に感謝し、自分のアイデンティティ作りの鮮やかな展開点となった大学共同セミナーを、私の「卒業証書」としたいと思っています。

国際館建設のための

開館20周年記念募金第七回報告

(88年2月末日現在)

申込総額 一四三、六四一、〇〇〇円

(内入金済 一四二、八二一、〇〇〇円)

内訳

- 財界関係七三件一三三、六二〇、〇〇〇円
大学 三五件 四、四六〇、〇〇〇円
一般 二五件 八〇五、〇〇〇円
個人 二五九件 四、七五六、〇〇〇円

寄付申込者(芳名)

(申込順)

財界関係

- 三菱油化株式会社殿
電気化学工業株式会社殿
大日本インキ化学工業株式会社殿

- 新日本製鉄株式会社殿
株式会社長崎屋殿
旭硝子株式会社殿
株式会社忠実屋殿

一般

- 有限会社大学セミナー・ハウス食堂殿
有限会社伊登勢屋殿
株式会社なかじま外商センター殿
有限会社三多摩清運殿
信州大学教授 南原実殿
青葉学園短期大学教授 吉田美穂子殿
東京都立大学教授 慶谷壽信殿

個人

- 五、〇〇〇円 慶谷伸代殿
一〇、〇〇〇円 中央大学職員 天野成光殿
一〇〇、〇〇〇円 成蹊大学教授 宇野重昭殿
二〇〇、〇〇〇円
大学セミナー・ハウス名誉館長飯田宗一郎殿
一〇〇、〇〇〇円
聖心女子大学名誉教授 岡宏子殿

千人会

'87年12月

'88年2月

現在会員一、五一一名(実会員数)
(通算入会者、七九六名)
会費ありがとうございます。
飯田芳男、青柳清孝、都留春夫、戸張よし子、市川節子、内藤正、増田義男、茂木誠陸、城謙輔、浅見一羊、大谷禎之介、伊藤文人、杉山吉茂、有山正孝、三浦安子、宮川松男、小西正捷、金台然、厚東偉介、茅伊登子、秋間実、濱川祥枝、沢孝一郎、浮田久子、金子保竹、内啓一、山田暁、尾田幸雄、西田亀久夫、横沼健雄、清水誠、平木典子、半谷高久、池川貞雄、池田孝夫、鬼塚宏太郎、山下幸夫、池川郁子、田村暁司、大須賀節雄、朝日信夫、慶伊富長、籠信義、三戸公、藤井賢二、永井裕、来住正三、三井友友、宮川透、藤林宏一、麻生幸、福原満洲雄、生山智昌、清水啓三郎、佐々木邦彦、塚本利明、三浦永光、中西治、高橋恒郎、伊藤学、沢田精二、平松幸一、飛田茂雄、高木仁、大川信明、高橋浩嗣、小林哲也、石田孝夫、桑原哲郎、杉山好、岡崎正、矢野成光、川端香男里、遠藤健治郎、青柳総太郎、上田明子、瀬川渡、大口勇次郎、松澤正夫、瀬野信子、合田信子、高橋公夫、京藤哲久、上山碩、小宮敏夫、山田圭一、白井泰四郎、斎藤耕二、矢野正、後藤聰一、深沢実、吉永フミ、住田友文、一鈴ヶ瀬康子、木村康雄、川崎正三、大野聖、鈴木重、佐藤進、伊藤清和、武藤義夫、森山俊雄、猪瀬博、刈田元司、中富光国、鈴木博、堀光男、萩原玉味、徳座晃子、師岡孝次、小野旭、田中国昭、石井明、大羽滋、江幡玲子、田中英夫、園田義

道、松山正男、小山弘志、小谷正雄、慶谷壽信、小野寺嘉子、武田昌輔、鈴木謙三、相原光、吉川孔敏、乾崇夫、古田勝久、内山正熊、篠崎武、柳父園近、高村新一、根岸愛子、小北清子、平川紀一、遠藤一郎、川喜田愛郎、北原文雄、石川道夫、加倉井茂樹、佐藤音彦、池井優、藤巻正生、小俣武夫、富沢賢治、石塚司農夫、竹林代嘉、上谷琢之、茅野良男、清水畏三、若林代嘉、京塚純一、木下是雄、桜井清彦、山田辰雄、大頭仁、高橋昭三、北野弘久、磯野修、大森東亜、小川洋輔、新井明、石井素介、吉田光孝、金子ハルオ、今井清一、河田敬義、松原元一、原増司、柳沢富雄、谷資信、岩佐凱實、中利太郎、若山邦紘、鐘ヶ江信光、石井正博、板垣雄三、東川清一、北村嘉行、石堂常世、仙田哲、平岡勇、吉田公保、吉田耕作、森昭彦、中村孝之、板橋並治、大野京子、寺東英治、丸節夫、遠藤平治、松島千代野、丹羽芳雄、井原恵治、東洋、藤井良治、西田貴子、矢田俊文、久保亮五、福永壽己夫、蓮見音彦、折田政博、大岡信、川喜田二郎、山口俊夫、齋藤眞、新澤雄一、箕輪成男、三神勲、岡村秀男、勢山秀子、小幡史朗、原田敬一、本間仁、昌谷春海、中村妙子、秋間実、小川政亮、若林玄修、佐藤百世、崎野滋樹、泉敏彦、野沢辰、磯直道、渡辺武雄、中島力、正路徹也、古賀正則、笠耐、平野由紀子、彦由一太、島美喜子、熊澤義宣、門脇卓爾(敬称略)

千人会員からのたより

会員数が千五百人を超えましたとのこと、おめでとうございます。なお一層の会の発展を祈ります。
東京医科歯科大学教授 増田義男
四月下旬に四十人の学生とまたお世話になります。八重桜が美しいころと楽しみにしております。
中央大学教授 飛田茂雄
昭和63年3月で70歳の定年退職をします。
東京家政学院大学教授 吉永フミ

昭和45年はじめて訪問した時は、緑の少ない丘でしたが、先日、最近の写真を見せ、緑豊かな様子をうれしく思い、また時間の経ったことを痛感しました。
パシフィック・コンサルタンツ・インターナショナル 川崎正三
電気通信大学を定年退官し、四月より武蔵工業大学電子通信工学科に変わりました。早速、新設セミナーで、セミナー・ハウスのお世話になりました。武蔵工業大学教授 遠藤一郎
四月より次のように勤務先が変わります。このところ創文社のハイデッカー全集の訳業にかかりです。
大阪大学名誉教授・大阪国際大学教授 茅野良男
主宰する政治経済史学会も、創立25周年を迎えました。月刊「政治経済史学」も第22号を達成しました。玉川大学教授 彦由一太
再び健康を回復して感謝しています。
東京神学大学教授 熊澤義宣

寄付金報告

'87年12月
'88年2月

一般寄付金

- 五、〇〇〇円 おさひめ幼稚園
三、〇〇〇円 早稲田大学片山覚ゼミ
一〇、〇〇〇円 順天堂大学医学部第7回新P3クラスセミナー殿

教育プログラム資金

- 一七、三〇六円 第142回大学共同セミナー殿
植樹
ブルーベリー30株 玉川大学農学部園芸研究室殿
くらがねもち 山村硝子株式会社殿
はなみずき 生活協同組合都民生協殿

# 宿泊利用者100万人達成を祝う



'88年2月18日／於・交友館

# 真理の鐘が鳴り響く中で



早大・新澤ゼミ100万人目に

65年7月5日の開館日より数えて22年7ヵ月14日目に、宿泊利用者が延100万人に到達した。この記録を達成した2月18日には、七グループ二六一名の宿泊者があつたが、幸運にも100万人目に当つたのは、早稲田大学商学部の新澤雄一教授ゼミであった。当日は午後のお茶の時間を利用して交友館でお祝いの会が催され、先の新澤ゼミの他に、東京都立大学の鳴澤実助教授率いるエンカウター・グループと中央大学経理研究所の学生たちにハウス関係者、職員らを加え約一八〇名が参加して、喜びを共にした。

開会に当って中川館長は、「これまでの軌跡を礎に200万人達成への新しい発展の契機とした」と挨拶。次に新澤雄一教授が喜びのことは「(別掲)を、そして利用グループの学生を代表して、エンカウター・グループの参加者・東京女子大学の増田亜紀子さんと、ハウスの設計者U研究室の松崎義徳氏がそれぞれお祝いのメッセージを述べた。

続いて利用者へ記念品が贈呈され、教師館屋上の「真理の鐘」が開館以来の年数を刻んで23回点鐘されると、式はいよいよクライマックスに。学生代表三人の手でくす玉が割られ、喜びと感謝の大きな拍手が起つた。

参加者はこの後、交友館に準備されたコーヒーとケーキで時間の許す限り歓談し、それぞれのゼミナール室へと散会した。

因みに利用者第一号は、開館記念とし

て開催された第1回大学共同セミナー「世界の中の日本」の運営委員長をつとめられた永井道雄氏(当時、東京工業大学教授)である。100万人達成の報を受けて、氏は「朝日家庭便利帳」(88年4月号)に「学問の心と自然」とを執筆された(全文を12頁に別掲)。

## お祝いの言葉

### 理想郷の住人になって二十二年

——百万人目の幸運——

早稲田大学教授 新澤 雄一

唯今百万人目のグループとして御報告を頂戴しました新澤でございます。大変光栄に思います。

私がこのゼミナー・ハウスへ参りまして、本館を見上げますと、今から八年前の昭和五五年の十二月に亡くなった、早稲田大学理工学部建築科教授の吉阪隆正先生を思い出しております。昭和三十九年に早稲田に専修学校を作った時に、兼任の主任として先生のお隣に机を並べることになりましたが、当時先生は八王子にゼミナー・ハウスというユニークなプロジェクトが進行中で、その設計を担当されていると申されました。現在皆さんがご覧になっている模型の建物は、先生が荒廃している大学に警告を含めて、「大地に楔を打つように」との心を込めて設計されたのでした。これこそ新しい建築様式であった、この建物によって、大学の新しい姿が象徴されると主張されたのであります。

開館のその六年前の昭和三十四年一月三日に、現在ゼミナー・ハウスの名誉館長であります飯田宗一郎先生が、日本女子大学学長の上代たの先生にお手紙を差し上げて、大学へ即ち大学の教員と学生が一体となるような新場の必要性を説いたのであります。とくに新制大学が発足してから、教員と学生の間に疎遠になり、旧制高等学校のような雰囲気無くなつてしまふ、そういう意味で、教師と学生が一体となった人間形成の場を国公立を問わず作りたことと訴えたことに始まります。東京大学総長の茅誠司先生や早稲田大学総長

また当日の様子は、朝日、読売、毎日の各紙が、翌19日の朝刊で報道したのをはじめ、「文教速報」、「文教ニュース」(どちらも2月29日発行号)「大学と学生」(3月10日発行号)がそれぞれ写真入りで紹介した。

の大浜信泉先生や、広く財界の方々によびかけて、多大の援助をうけ七年の歳月を掛けて開館したのであります。

ハウスの落成式に、東京大学総長大河内一男先生は空想社会主義のロバート・オーエンの活動を振り返って、次のような祝辞を述べられたのであります。ロバート・オーエンは、当時腐敗堕落した英国の社会に絶望し、アメリカに新天地を求めたのであります。それがうまく行かず事志とは異なつて一年間で閉鎖し、英国へ引き上げられたのであります。大河内先生は、ひょっとすると、二年で閉鎖になつてしまふことを危惧されたのかも知れませんが、このような事業を継続させるためには、広い範囲の人々の援助と、可なり努力の積み重ねが必要であるとういうことを仰しゃつたのだと思います。

私が昭和四一年の二月にこの地に参りましてから、ほぼ毎年この時期に卒業論文の最終発表会を行い、二十年以上経ちましたが、飯田先生が御着想を得てからは、ほぼ三十年経過ぎて、延べ百万人もの人々がこの地に接した事は非常に素晴らしい事であると思えます。実現しない理念は空想であり、実現可能な理念は理想といひますが、ロバート・オーエンのニュー・ハーモニーの理想が空想に終わってしまったのに対して、今日この席に御出席しておられるかどうかわかりませんが、いつもここへ参りますと、お会いしてお話を承るのであります。飯田先生の理想と御努力がここによりやく実つて来たのであると思ひます。

ゼミナー・ハウスが、今日百万人の宿泊を達成出来たことは、飯田先生をはじめ隠れた多くの人々の支えがあつたからであり、二一世紀にむかつて百万人目、三百万人目の人々を迎える事を祈念して、お祝いの言葉とさせて頂きます。おめでとうございます。

87年12月、88年1・2月

年末と年始の合宿セミナーから

この丘に、四季が移り変わる——12月第1日曜日の朝、紅葉の残る樹々が一転、思いもよらぬ初雪におおわれた。折しも開催中の共同セミナーのテーマ「神秘主義」にふさわしい、色あざやかな、秋と冬のコントラストともいえるべき光景であった。そして、歳月が流れる——開館して22年7ヵ月余。かねての予想どおり、早春2月中旬、宿泊利用者が延べ100万人台に到達、ささやかなお祝いの会が和やかな雰囲気の中で催された。

●宿泊利用者がついに100万人に

前頁の記事のとおり、2月18日、その記念すべき、喜ばしい記録がつけられた。この日の宿泊者二六一名で延べ一〇〇万八〇人となり、待望の大会への到達がかなえられた。その間、この丘で繰り広げられた国内外の大小さまざまな合宿セミナーは二万一、五五四回におよぶ。国・公・私立大学の素晴らしい「参加」の証明である。そして、これを支えて下さった「100万人」おひとりおひとりに、心より感謝申し上げたい。  
「100万人」への歩みはハウス23年の成長の軌跡である。静かな自然の中での、人間的な心の触れ合いを求めてハウスに

集った人びとの足跡である。ここを拠点に、人と人、大学と大学を結ぶ交流の輪が広がっていったことを証しする数値を拾ってみると、①年間の利用者は、施設の拡充と相俟って、当初の三万人台から五万人台へとふえた②協力会員校は25校から64校（国立14、公立5、私立45）へと広がった③新入生オリエンテーションの合宿をとってみても、67年の8件（二、五一一人）から87年の66件（二万三二六人）へと増大した、などがある。大学紛争を経て、「宿泊をとまなうセミナー活動」の意義が年々高く評価されてきたことを、23年間のこれらの数字が物語っている。

●アモルファスセミナーが「全館貸切り」

晩秋の11月末より12月初めにかけての二泊三日、アモルファスセミナーが、東京工業大学の清水勇教授・小田俊理助教授らのお声掛けで、初めてハウスで開催された。正式には、応用物理学会（電子物性分科会）主催の第14回アモルファス物質の物性と応用セミナー「第2世代のアモルファス研究」。先端産業の一翼を担う新材料として着実に根づきつつある同物質に関する研究発表と討論で、大学、国立研究機関、民間企業の若手研究者ら約二六〇名が参加した。懇親パーティや深夜にわたる「本音でもの言える」分科会でハウスをフルに活用できるようにと「全館貸切り」となったが、所期の成果を上げ、「この種の交流にハウスはまこ

祝100万人達成

学問の心と自然と

朝日新聞客員論説委員

永井 道雄

東京都下の八王子にある大学セミナー・ハウスから、一通の便りが私の手もとにとどきました。その要旨はつぎの通りでした。きたる2月18日には、開館以来の宿泊利用者が100万人に達します。開館記念の大学共同セミナー以来、22年7ヵ月14日の歳月をへてこの数に達しました。これからは200万人をめざします\*。

この便りを手にした私には深い感慨がありました。このハウスでのセミナーが始まった1965年当時、私は大学の教授であり、開館以来ながくセミナー・ハウスの利用者として益をうけてきたからです。

このハウスの創設を思いつき、文字通り東奔西走して資金を集め、協力者とともに創設したのちも、その運営に努力してきた中心は飯田宗一郎氏です。飯田氏は、同志社大学、東京女子大学、国際キリスト教大学で事務局の責任ある立場にあったのですが、当時、疑問を抱かざるをえなかったのは、日本の大学の閉鎖性、国公立の大学の格差、マスプロ教育などの問題でした。協力者に学界の茅誠司、大浜信泉、上代たけの、経済界の佐藤喜一郎の諸氏名をえて、創設にこぎつけたのですが、その飯田氏が夢みしたのは「建物と人間と理念の総合」でした。

多摩の丘陵のいつか、ある緑のふところを抱かれた場所に、清礎なセミナー・ハウスとユニット・ハウスと呼ばれる宿泊施設をつくり、そこで教授と学生が起居を共にし、大学の理想をよみがえらせる。それが当初の目標であり、それを実現したものが、セミナー・ハウスなので

す。

1965年といえは、高度経済成長のピークにあたる時期であり、大多数の日本人は経済、あるいは技術に気をとられ、もう一度、大学をよみがえらせることなど思いも及ばぬほどでした。こうした苦難の中での船出であったにもかかわらず、セミナー・ハウスの施設は着々と整い、大学院セミナー館、国際セミナー館、交友館、テニスコートなど、多様なものが丘に立ちならぶようになりました。

セミナー・ハウスの活動内容も、大学の壁をとりはらった共同セミナーや合同セミナー、国際学生セミナー、新入生オリエンテーションなど、やはり、多様なものをふくむようになったのです。そして22年余をへて、100万人の利用者総数に。記念すべき、喜ばしいことだと思えます\*。

では、大学の問題は解決されたのでしょうか。

22年前と比較すると、日本は豊かになり、情報化の進展につれて、大学にも社会にも情報がみちあふれるようになりました。しかし、大学の閉鎖性、大学間の格差、一人一人の学生に対する教育の不足などの点で、大学にはいままも数多くの問題があります。これまでセミナー・ハウスに集まった100万人は、これらの問題を考えうるうえで、それぞれ何らかの答えをえたことでしょう。

社会の急速な変化、大学の拡張のなかで、大学の伝統を創造的に継承する課題は難しく、日本だけでなく、世界の多くの国々がこの課題に直面し、よりよい発展を求めて努力しています。

多摩丘陵での世代をこえた対話が200万人をめざして、一層実りあるものとなることを期待しています。

〔朝日家庭便利帳（'88年4月号）「永井道雄の眼」より転載。〕

とに好適」との評を残された。

●87年も八王子合宿で締めくくる

12月は冬休み開始前後の合宿で、例年同様常連の諸グループをお迎えした。卒論発表などのゼミ合宿に混って、学科規模での利用は東泉女学園短大英文科の

■トピックス■

餅つき大会

12月26日、かやぶきの民家・遠来荘で恒例の餅つき大会が行われた。利用者有志、職員が杵をとり、5グループ175名がつきたての餅を味わった。毎日の忙しさにまぎれている年の瀬が身近かに感じられるひとときである。



杵の音も年末の風物誌の一つになった

成人の日の交歓会

1月16日の夕食時(7グループ280名)に「祝成人の日」交歓会が行われた。「新成人」は順天堂、早稲田、中央の3大学

「国際」ゼミナール(二〇六名)。今回のテーマは「国際・現代・われわれ」。7年目で、昨年からは7月と12月の二回にわたっての実施となったが、冬はクリスマスまでの季節の合宿がすっかり定着した。同月の締めくくりは、今年も田村皖司教授の指導による杉野女子大学「教育原理ゼミ」

からの25名。満場の拍手の中で、ハウスからの記念品が順天堂大学の学生部長・山下辰久教授より一人ひとりに手渡された。

ブルーベリーの贈物

常連の玉川大学農学部園芸研究室の田中宏教授と学生計5名が12月24日来館、出合いの丘通路沿い斜面にブルーベリーの苗木30株を植えて下さった。米国産で、4月にはずらん状の白い花、6〜8月には実をつけるとのこと。利用者、そして野鳥にも喜ばれるであろう。何よりのクリスマスプレゼントであった。



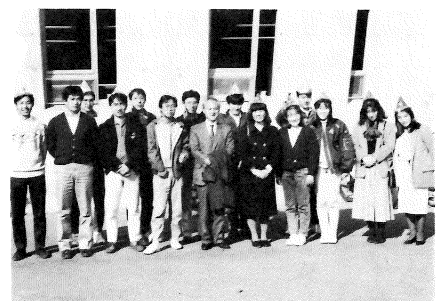
新名所・ブルーベリー通り

と文学教育研究者集団(文教研)。前者では学生三〇名が年の瀬に七泊の長期ゼミナーに挑戦したが、全員が研究報告をまとめ上げ、28日「仕事納め」にはさわやかな表情でこの丘を下りた。

●88年新春合宿事始め

1月は例年、学年末試験をひかえて大学関係の利用も少なくなるが、仕事始めの1月5日には、文教大学女子短大など早々に四グループ一三〇名もの来泊者を迎え、幸先の良いスタートをきった。第2週には恒例の東京神学大学「教職ゼミナー」が全国各地からの教職者らを迎えて開催され、中日には交友館で館長接待のコーヒータイトムが持たれた。週末には、六グループ二六〇名で賑った。うち、

順天堂大学新P3クラスゼミナー(二一八名)は1月中では最大規模、厳寒期に七年連続開催の定例合宿。今春専門課程に進む医学部新3年生のオリエンテーションを兼ねた独自のプログラムで、教師の参加は二九名、これに上級生も加わっての親身の交流がいつも印象的である。順天堂の利用には、このほか、開館当初から続いている秋の「病院業務改善ゼミナー」(本紙No.100に紹介記事)がある。ともに、医科系諸大学がハウス活用を検討される上で参考にして頂きたい好企画である。本号の「わたしたちの合宿」(14頁)では酒井シズ教授に「新P3クラスゼミナー」をご紹介いただいた。



成蹊大学・宇野ゼミ  
クリスマススイブの合宿  
——中央は宇野重昭教授



集中講義「国際機構」  
——小和田恒氏(東京大学講師)  
OECD 代表部大使赴任を前に、  
学生とお別れの合宿 (1.24)

◁年末・年始の合宿から▷

●立春——学年末の合宿

期末試験から解放された私立各大学の合宿が再開され、この丘に活気が戻るのは、今年も2月4日立春の日からであった。事実上春休みに入り、週日にもサークル連合会のリーダーズキャンプなど課

外活動の合宿も盛んであった。中旬には東京地区教育実習研究連絡協議会主催の「インターカレッジ教育実習セミナー」が行われた。千人会員の鈴木慎一・早稲田大学教授らが中心となって企画・運営された「共同セミナー」で、会員校12校



KENWOOD シンガポール人  
研修生ら  
八王子工場で昼休みに



石川島播磨重工業  
11泊の「英会話特訓」を終えて  
(本文参照)

◁国際化の中の企業研修▷

を含む国公私立21大学から約一〇〇名が熱心に参加した。また、2月は受験シーズンでもある。ハウスは中央大学の要請で数年来同大の受験生に宿舎の一部を提供してきたが、今年は2月中旬の一週間に例年より多い延四三二名がユニット・ハウスに宿泊している。

●企業研修ではシンガポール人の長期滞在も

石川島播磨重工業の中堅社員三五名が「英語集中訓練」で外国人講師と12月に十一泊した。「自然環境」「生活交流」が語学研修におよぼす効果が評価され、同社のこの合宿はすでに数回実施されている。一方、八王子に工場をもつケンウッドの、シンガポール進出にともなう現地中堅社員の滞日研修計画で、9〜12月の四カ月間にシンガポール人研修生十数名が数グループに分かれて長期滞在、延べにすると八一七名におよんだ。このように長い宿泊となると習慣や考え方などの違いも「本音」として表出するので、「日常性」の中での彼らとの対応はハウスにとって一つの貴重な「異文化体験」となった。右の二つは、ともに国際化時代を反映した当施設の新しい利用例である。

ほかに企業グループでは京セラ、山村硝子の利用が多かったが、一度ここでの生活を体験されたグループがハウスのよき理解者となって次の予約をされ、「常連」となって下さっていることは大変有難いことである。

わたしたちの合宿

7年目を迎えた  
新P3クラスセミナー

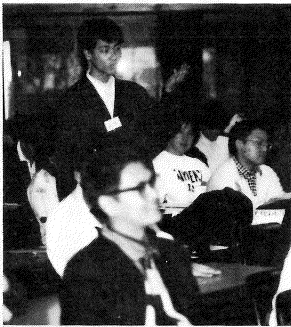
順天堂大学医学部教授 酒井 シズ

一九八三年から毎年、順天堂大学医学部では、一月の厳冬期に、入学して二年目の学生を対象に、八王子のセミナー・ハウスで合宿を行ってきた。

本校のこの時期の学生は習志野で一般教育を終えて、本郷で専門教育に入ったばかりである。のんびりと習志野で過ごしてきた学生が環境の全く違うキャンパスで、いきなり過密な専門の授業に追われ、生活が激変するときである。

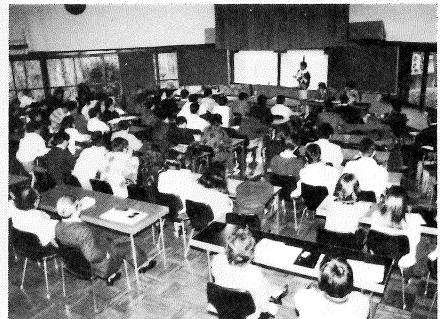
この合宿を始めた動機は、医学生としての目的を再考させ、新しい生活を積極的に受容させようということにあった。また医学教育に必要な全人教育の場としてこの機会を活用しようということにあった。

合宿では専門を離れたテーマで外来講師による講演を行い、そのあと小グループ



質疑応答にも熱がこもって

プに分かれて、教師と学生が膝をつき合せて、語り合い一夜を過そうということが始まった。普段の教育だけでは得られない個人的な交流がここで始まる。無論すべての目論見が思い通りに進んだとはいえないが、年を重ねるごとに、これを始めてよかったという実感が生まれ、試みて始めたこの合宿が年間行事の中に定着していったのであった。キャンパスから遠く離れた八王子で、しかも厳寒期にということ、教師にも学生の中にも尻込みする気持はなくはなかった。しかし、この地にやってくると、空気は澄み、早朝からの鳥の声は「すがすがしい」という言葉を実感させてくれる。凍った道を、白い息を吐きながら行き逢う学生と挨拶を交しながら、ああ、今年もやってきてよかったと思う合宿なのである。



グループ別討議の報告をする学生代表

# 利用状況

●12月(87グループ、延三、八五九人)  
 日本大学教授  
 千葉商科大学教授  
 国際基督教大学教授  
 早稲田大学教授\*  
 学習院大学教授  
 東京電機大学助手  
 東京学芸大学教授  
 東京都立大学教授  
 早稲田大学教授\*  
 東京女子大学教授  
 東京大学教授  
 中央大学教授  
 東京都立大学教授

●12月(87グループ、延三、八五九人)  
 日本大学教授  
 千葉商科大学教授  
 国際基督教大学教授  
 早稲田大学教授\*  
 学習院大学教授  
 東京電機大学助手  
 東京学芸大学教授  
 東京都立大学教授  
 早稲田大学教授\*  
 東京女子大学教授  
 東京大学教授  
 中央大学教授  
 東京都立大学教授

## 宿泊利用者に10万人達成を 祝う会に列席して

東京女子大学短期大学部カウ  
ンセラー 野村 法子

毎年二月に恒例となり、七年余り  
続いておりますエンカウンター・グ  
ループ合宿の宿泊中に、この記念の  
セレモニーに参加させていただく好  
機を得ました。

セレモニーは、和やかな雰囲気の中  
に、折り目正しく、よく考えられ  
た趣向で行われ、ひき続け和気藹々  
としたテイラー・パーティと共に、セ  
ミナー・ハウスらしい印象として心  
に残りました。

10人位の少人数の話し合いの中で  
他者理解、自己理解を深めようとし  
る我々の試みをセミナー・ハウスで  
営ませていただき、感謝することが  
多くあります。清潔さ、施設の整備  
等、宿泊生活を支える土台にしか

東京都立大学助教授 森岡 清志

早稲田大学教授 十代田三知男

東京電機大学教授 大塚 功三

日本大学教授 伊藤 清和

埼玉大学教授 村上 健

東京都立大学教授 坂元 忠芳

東京都立大学講師 山川 生夫

慶応義塾大学教授 小池 仁太

青山学院大学教授 金 台然

明治学院大学助教授 増田 茂雄

法政大学教授 笠島 芳雄

東京都立大学教授 五味 健吉

電気通信大学教授 長浜 邦雄

早稲田大学教授 萩原洋太郎

早稲田大学教授 早稲田大学教授

駒沢大学助教授 片山 寛

早稲田大学教授 福田 耕治

恵泉女学園短期大学英文学科総合講  
座「国際」セミナー 川原 榮峰

東京大学教授 坂部 昌典

東京大学教授 坂部 恵

りと配慮が行き届いていること。自  
由な雰囲気の中にも、人が集う場  
に必要なマナーが押しつけでなく存在  
することが、実際の配慮をもつて実  
現されていること(二人部屋である  
のに鍵が一人一人に渡される時に実  
感します)等です。時として火花を  
散らすような個性の出会いがあつた  
り、グループの一体感の良い心地に  
なり、周囲の現実を忘れそうになる  
時など、セミナー・ハウスのこのよ  
うなありようは、大きな枠となつて  
一人一人を、またグループの営みを  
護つてくれているように思います。

今後学生たちの自己研鑽の場と  
して、また、学ぶ心を持つ社会人に  
も開かれたところとして、ますます  
多くの人の足跡がセミナー・ハウス  
の丘に記されましようにご発展をお  
祈り申し上げますと共に、セミナー・  
ハウスを守り育てていらつしやる職  
員の皆様に感謝いたします。

東京都立大学教授 山住 正己

武蔵大学教授 村田 晴夫

東京理科大学教授 狩野 紀昭

日本大学教授 谷野 隆一

東京都立大学教授 菅沼 憲治

東京都立大学教授 桐原 誠

東京都立大学教授 原谷 維

早稲田大学教授 金子ハルオ

早稲田大学教授 平澤 茂一

白梅学園短期大学教授 長内 了

電気通信大学教授 民野 言

慶応義塾大学慶応霞会 芳野 越夫

成蹊大学教授 宇野 重昭

東京経済大学教授 石丸 晶子

駒沢大学教授 杉浦 智紹

中央大学教授 五井 一雄

明星大学助教授 吉田 恒雄

中央大学助教授 中川洋一郎

駒沢大学講師 渡辺 裕子

慶応義塾大学助教授 緑川 信之

杉野女子大学学友会 田村 皖司

高千穂商科大学教授 平野 文彦

横浜商科大学教授 常田奈津子

日本女子体育短大講師 厚東 偉介

立正大学教授 藤村女子高校教育研究会

和光高等学校教科書資料編集 藤村女子

第142回大学共同セミナー 銀河研究会

合同セミナー「発展途上国問題を考  
える」

国際学生シエイクスピア連合

国際経済商学生協会\*

古代解放運動史研究会

第14回アモルフラス物質の物性と応  
用セミナー

教育学習会

東京多摩のいのちの電話

文学教育研究者集団

山村硝子\*

ヒューマンライフセンター

ケニウッド大王事業所シンガポ  
ール人研修生

東芝府中工場

アイワールド  
石川島播磨重工業

## 新年度の利用料金は据置きです

4月からの利用料金は据置き  
といたします。昭和58年度以来  
6年連続の据置きで、会員校学  
生一人当りの一泊三食の料金は  
三、八〇〇円です(泊数に関係  
なく、別途、三〇〇円の施設改  
修協力金も従来どおり)。  
もとより会員校はじめ利用者

の方々の負担をできる限り軽  
く、との従来の方針に基づくと  
ますが、年々増加する支出を  
まかない、経営の健全性を確保  
するために、利用者増をはか  
ることが必須の条件となりま  
す。年間を通しての、なお一層  
のご利用を切に願ひ申し上げ  
ます。

ダースキャンパ

彰栄保育専門学校 福田 東子

東京神学大学第19回教職セミナー

キリスト者学生会

チトクロームP450研究会

日本OR学会

東京多摩のいのちの電話

ロケットクズ275

劇団JVC

積水化学工業

生活協同組合都民生協

東北天然プリント工事

アイワールド\*

ユニ・ファースト

日本電気

日電アネルバ

酒井薬品

国際交流サービス協会

京セラ\*

多摩中央信用金庫

雪印物産

東芝

エース東京経営

富士電機総合研究所

ヒューマンライフセンター

有志

東京大学教授 高階 秀爾

早稲田大学文化団体委員会リ

明治学院大学文化団体委員会リ

青山学院大学講師 富田 功

東京女子大学講師 小和田 恒

東京女子大学短期大学部カウ

ンセラー 野村 法子

東京女子大学短期大学部カウ

ンセラー 野村 法子

# 予 告

## ●第144回大学共同セミナー

主題 人工知能は感性を持てるか？  
 期日 1988年6月18日～19日（土～日）

### ◇全体講義

感性と人工知能——機械は感性を持てるか—— 中京大学文学部教授 戸田正直氏

### ◇ゲスト講演

未定

### ◇シンポジウム

#### I. 人工知能の可能性と限界

(司会)東京工業大学工学部教授 田中穂積氏  
 東京大学工学部教授 鈴木木次氏  
 新世代コンピュータ技術開発機構 向井国明氏

#### II. 人工知能と心

(司会)青山学院大学経済学部教授 坂本百大氏  
 中京大学文学部教授 戸田正直氏  
 聖心女子大学文学部助教授 往住彰文氏

#### III. 芸術・創造性・感性

(司会)東京都立科学技術大学工学部教授 川野 洋氏  
 大阪大学工学部教授 白井良明氏  
 他2名を予定

駒沢大学教授 国際基督教大学講師 東京電機大学リーダーズ・キャン 明治大学教授 青山学院大学教授 慶応義塾大学ワグネル・ソサイエ ティ男声合唱団 中央大学経理研究所* 明治大学学生保険委員会 中央大学教授 駒沢大学美術部 東京立大学助教 上智大学シエイクスピア・プロダク ション 早稲田大学教授 国際基督教大学講師 東京理科大学助教 帝京大学明日の会 早稲田大学教授 東京経済大学教授 武蔵大学体育連合会 早稲田大学教授	森 武彦 喜山 朝彦 原 正彦 寺東 寛治 池上 秋彦 富岡 幸雄 金谷 貞男 平澤 茂一 伊藤 喜栄 伊藤 順康 鈴木 慎一 宮崎 義一 新澤 雄一	東京都立大学助教 東京都立大学助教 工学院大学助教 早稲田大学国際学生友好会 東京経済大学文化会本部* 東海大学助教 駒沢大学助教 共立女子大学助教 駒沢大学教授 一橋大学教授 東京立大学助教 早稲田大学助教 東京理科大学助教 東京理科大学助教 東京都立大学教授 慶応義塾大学英語会 東京YWCA専門学校社会福祉科 女子聖学院短期大学CCF 和泉短期大学児童福祉科 明治学院高等学校 中央地区教育実習研究連絡協議会 東京大学受験生 日本学生経済セミナー東京部会	鳴沢 実 河村 望 加藤 尚武 綾野 克俊 関口 雅夫 入江 和生 寺中 良二 古賀 正則 宮川 彰 川端 尚 鈴木 恂 狩野 潔 狩野 誠 清水 昭 澤田 誠 日本学生経済セミナー東京部会
---	---	--	--

## ●第9回大学院共同セミナー

主題 正義と無秩序  
 ——21世紀の法哲学への展望——  
 期日 1988年7月1～3日（金～日）

### ◇特別講演

法をどうみるか——相互主体的視座の確立をめざして 京都大学法学部教授 田中成明氏

### ◇講義と演習

I. 現代社会契約論と正義  
 立教大学法学部教授 小林 公氏

II. 自由——老子とホッブズの間——  
 東京大学教養学部教授 長尾龍一氏

III. 権利論——現代英語圏の議論を中心に——  
 一橋大学法学部講師 森村 進氏

IV. 法と哲学——法を作るのは理性ではなく、  
 権威である？——  
 名古屋大学法学部教授 森際康友氏  
 <運営委員>東京大学教養学部教授 長尾龍一氏  
 青山学院大学経済学部教授 坂本百大氏

◇問い合わせ先=企画室 ☎0426-76-8532

朝日カルチャーセンター  
 東京都高等学校教職員組合第7支部  
 青年部  
 三多摩・フィリピン資料センター  
 東京武蔵野YMCA  
 日本山岳協会  
 御茶の水キリストの教会  
 KJ法研究会  
 わかくさの家  
 劇団JVC  
 共助保育園  
 ホソカワミクロン  
 オリエント時計労働組合  
 小松ゼノア  
 酒井薬品\*  
 ミクプランニング  
 西武百貨店労働組合  
 中野輸送\*  
 コニカ\*  
 富士フアコム制御  
 日本電気\*  
 日電アネルバ  
 A I C

『巨大技術と人間』  
 朝倉書店より刊行  
 第139回大学共同セミナー（'87年3月開催）が出版物に  
 「世紀末の技術論争、ここに始発、新しい巨大さ」を根本から問う白熱の講演と討論——原発・人工知能・海洋情報都市・宇宙開発・地域開発そして巨大事故——（本書の帯より）

内容  
 原子力は、もはや科学技術でもない複雑さへの挑戦としてのコンピュー

夕技術……横井俊夫  
 海洋情報都市……寺井精英  
 巨大技術をめぐる人間と環境の問題  
 宇宙開発と日本人……大河信郎  
 技術・教育・経済制度……宇沢弘文  
 他にシンポジウムの質疑応答を再録。

編者 江沢 洋十坂本百大十室 田 武  
 発行日 '88年3月15日  
 定価 1,200円  
 （本館フロントにて15%引でお頒けします。ご来館の際にお求め下さい。）

●編集後記●  
 雑木林の新芽が運送の桜を待ちかねるかのよう顔をだし始めると、本格的な新入生オリエンテーション合宿の季節が到来します。花と緑が織りなす歳月の恵みが、今春は殊の外強く感じられるのは、2月18日に記録した宿泊利用者百万人達成の余韻によるものでしょうか。本号は「祝百万人」の意味をこめて編集しました。百万人目となられた新澤雄一 早大教授の祝辞は、大学セミナーハウスの発想が、「実現しない理念は空想であり、実現可能な理念は理想である」（本紙11頁より）という言葉の重みを改めて気づかせてくれました。また、二十三年前の開館記念セミナーで運営委員長をつとめられた永井道雄氏は、さしづめ利用者第一号ということになりました。同氏は「本紙12頁に全文をおられるコラム「自分が担当してみがえさせる」ことを目標にして、それを表現したものとハウスのことを表現されました。この丘に集った人々の足跡の一つ一つに、そして夢と理想をかけてゼミナールの拠点作りに参画された人々に、心からの謝意と敬意を表したいと思います。（能）

「セミナーハウス」一九八八年四月二五号 発行 財団法人大学セミナーハウス 〒一九二〇三 東京都八王子市下柵木 ☎0426-768511 振替口座 東京五七四五九〇番 編集 大学セミナーハウス企画室/編集・発行 中川秀雄/製作 中央公論事業出版